

スポーツイベントボランティアの活動満足度と
センス・オブ・コミュニティ，ならびに
心理的ウェルビーイングとの関連

スポーツ科学研究科 スポーツ科学専攻

学籍番号 221M17

氏名 藤田 夏寧

指導教員 富山 浩三 教授

論文内容の要旨

題 目 スポーツイベントボランティアの活動満足度と
センス・オブ・コミュニティ，ならびに心理的ウェルビーイングとの関連
学籍番号 221M17
氏 名 藤田 夏寧
指導教員 富山 浩三

本研究の目的は，スポーツイベントボランティア活動とボランティアコミュニティへのセンス・オブ・コミュニティ（以下，SOC），および心理的ウェルビーイングとの関連を明らかにし，さらにボランティアコミュニティへのSOCと心理的ウェルビーイングとの関連を明らかにすることである。

本研究の目的を達成するために，「ボランティア満足度は心理的ウェルビーイングと関連がある」，「ボランティア満足度はSOCと関連がある」，「SOCは心理的ウェルビーイングと関連がある」の3つの仮説からなる仮説モデルを設定した。対象者は，2022年11月13日に開催された松本マラソン2022のボランティアである。主な測定項目は，活動満足度1項目，SOC15項目，心理的ウェルビーイング30項目である。

確認的因子分析を用いて分析を行った結果，SOC尺度1項目，心理的ウェルビーイング尺度4項目を削除，再度確認的因子分析を行った結果，一部検討する余地がある結果となったものの，一定の信頼性と妥当性を確認することができた。

構造方程式モデリングの結果，仮説モデルの適合度は $\chi^2/df=2.073$ ，GFI=.698，CFI=.837，RMSEA=.076となり，一部基準値を満たすことができなかったが，許容範囲内であると判断した。3つの仮説のうち，「ボランティア満足度」と「SOC」，および「SOC」と「心理的ウェルビーイング」には関連がみられた。

個人的属性やスポーツボランティア活動への参加経験有無による各尺度構造の差異を一元配置分散分析によって分析した結果，年齢別，およびスポーツボランティア活動への参加経験有無別において，有意な差が認められた。

本研究の結果より，スポーツイベント活動を行い，満足することと所属意識を感じることは関連があり，それらは70代以上の参加者，またスポーツボランティア活動経験がある人の方がより強く感じていることが明らかとなり，また所属意識を感じることはこの健康を感じることは関連があり，それらは70代以上の参加者，またスポーツボランティア活動経験がある人の方がより強く感じていることが明らかとなった。

Activity satisfaction of sports event volunteers and
Sense of community and its relationship to psychological well-being.

Natsune Fujita

Activity satisfaction of sports event volunteers and
Sense of community and its relationship to psychological well-being.

Natsune Fujita

Abstract

The purpose of this study was to determine the relationship between sport event volunteerism, sense of community (hereafter referred to as SOC) to the volunteer community, and psychological wellbeing, and to further determine the relationship between SOC to the volunteer community and psychological wellbeing. and psychological wellbeing to the volunteer community.

To achieve the objectives of this study, a hypothetical model consisting of three hypotheses was established: "Volunteer satisfaction is associated with psychological wellbeing," "Volunteer satisfaction is associated with SOC," and "SOC is associated with psychological wellbeing. The subjects were volunteers for the Matsumoto Marathon 2022 held on November 13, 2022. The main measurement items were one activity satisfaction item, 15 SOC items, and 30 psychological wellbeing items.

After reexamining the items using confirmatory factor analysis and deleting one item from the SOC scale and four items from the psychological wellbeing scale, we conducted confirmatory factor analysis again.

The results of the structural equation modeling showed that the goodness of fit of the hypothesized model was $\chi^2/df = 2.073$, GFI = .698, CFI = .837, and RMSEA = .076. Although some of the values did not meet the standard values, they were judged to be within acceptable limits. Of the three hypotheses, there was an association between "volunteer satisfaction" and "SOC" and between "SOC" and "psychological wellbeing. A one-way ANOVA was conducted to analyze the differences in the structure of each scale according to personal attributes and whether or not the participants had participated in sports volunteer activities.

The results of this study revealed that there was a relationship between satisfaction with sporting events and a sense of belonging, which was stronger among participants in their 70s and older and among those who had participated in volunteer sports activities. The results also showed that the sense of belonging and the sense of mental health were related, and that the sense of belonging was more strongly felt by participants in their 70s and older, and by those who had experience in sports volunteer activities.

目次

第 1 章 緒言	1
第 1 節 背景	1
第 2 節 本研究の目的	7
第 2 章 先行研究・仮説	8
第 1 節 先行研究	8
第 1 項 スポーツボランティアに関する研究	8
第 2 項 ボランティアと心理的ウェルビーイングに関する研究	8
第 3 項 ボランティアと SOC に関する研究	10
第 4 項 SOC と心理的ウェルビーイングに関する研究	11
第 5 項 先行研究のまとめ	11
第 2 節 仮説および仮説モデルの設定	12
第 1 項 仮説の設定・検討	12
第 2 項 仮説モデルの設定	13
第 3 章 研究方法	13
第 1 節 測定尺度の設定	13
第 1 項 SOC	13
第 2 項 心理的ウェルビーイング	14
第 2 節 調査の概要	15
第 1 項 調査対象	15
第 2 項 調査対象大会の概要	15
第 3 項 調査時期	16
第 4 項 調査方法	16
第 5 項 調査項目	17
第 6 項 分析方法	17
第 7 項 倫理	18
第 4 章 結果および考察	18
第 1 節 回答者の特性	18
第 1 項 個人的属性	18
第 2 項 ボランティア活動	18
第 2 節 測定尺度の信頼性と妥当性	19
第 1 項 SOC 尺度	20

第2項	心理的ウェルビーイング尺度	21
第3節	仮説モデルの検証	22
第4節	個人的属性やスポーツボランティア活動への参加経験有無による各尺度構造の違い	24
第1項	性別によるSOC構造・心理的ウェルビーイング構造の因子得点の平均の比較	24
第2項	年齢によるSOC構造・心理的ウェルビーイング構造の因子得点の平均の比較	24
第3項	スポーツボランティア活動経験の有無によるSOC構造・心理的ウェルビーイング構造の因子得点の平均の比較	25
第5章	結論	26
第1節	本研究のまとめ	26
第2節	インプリケーション	28
第6章	研究の限界と今後の展望	29
	参考文献	30
	図表	38
	付録	59

第 1 章 緒言

第 1 節 背景

スポーツボランティアの充実について、スポーツ庁は重要な要素と位置づけてその推進に取り組んできた。2010 年文部科学省が策定したスポーツ立国戦略では、「スポーツの意義や価値が広く国民に共有され、より多くの人々がスポーツの楽しさや感動を分かち、互いに支え合う『新たなスポーツ文化』を確立すること」を目指す姿として掲げており、それらを実現するために、「する人、観る人とともに、支える（育てる）人を重視」を基本的な考え方として掲げている。スポーツボランティアに着目し、人々が生涯にわたってスポーツに親しむことができる環境を整備していくことが明記されている。また、第 2 期スポーツ基本計画では、「スポーツボランティアの育成の推進が重要」と記載があり、様々な場面で活躍するスポーツボランティア参画人口の増加を図ることが求められている（スポーツ庁、2017）。また、第 3 期スポーツ基本計画では、スポーツの推進に不可欠となる「人材」といった基盤を確保・強化するために、スポーツに関わる人材の育成と活躍の場の確保を推進することが政策目標として掲げられており（スポーツ庁、2022）、スポーツボランティアへの関心は継続して高いものがある。さらに、スポーツ事業成立のためには、スポーツボランティアは必要不可欠な人的資源である（松岡・小笠原、2002）ことから、スポーツイベントが多く行われる近年、依然としてスポーツボランティアは重要視されている。

2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会では約 7 万 6 千人が「フィール

ドキャスト¹」として活動し、約 2 万人が「シティキャスト²」として活動した。また、スポーツイベントの中でも比較的多く開催されている市民マラソン大会は 2019 年時点で 116 大会あり（山田，2022），その他ランニングイベントなどを含めると数多くのマラソンイベントが開催されている。マラソンイベントにおいても、多くのスポーツボランティアが活動を行っていることがわかる。

一方で笹川スポーツ財団が 2020 年に全国の市区町村に居住する満 18 歳以上の男女 3,000 人を対象に行った調査によると、2020 年の一年間でスポーツボランティアを行った者は 5.3%となっており、コロナ禍前、2018 年のデータをみても 6.7%と決して多くはないことも明らかとなっている。また、元嶋ら（2022）は、スポーツボランティアの定義と実際の活動が乖離していることを指摘しており、スポーツボランティアの定義に変化が生じてきている。

ボランティアの語源は英語の「volunteer（志願兵）」、もしくはラテン語の「voluntas（自由意志）」からきているといわれており、その定義も様々なものがある。その中で、小谷（1999）はボランティアを「個人の自発的な意思に基づいて、その労力、時間、金品などを進んで社会に提供し、直接的な対価を求めず、社会の一員としての役割を果たす人」と定義している。ボランティア活動にも様々な定義があり、世界ボランティア宣言（1990）では、「個人が自発的に決意・選択するものであり、人間の持っている潜在

¹ 2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会において、競技会場や選手村などの大会関係施設で、観客サービス、競技運営のサポート、メディアのサポートなど、大会運営を支えたボランティアのこと。

² 同様に、空港・主要駅・観光地等での国内外の旅行者に対する観光・交通案内や、競技会場の最寄駅周辺における観客への案内等を行ったボランティアのこと。

的能力や日常生活の質を高め、人間相互の連帯感を高める活動である。」としており、また全国社会福祉協議会は「自発的な意志に基づき他人や社会に貢献する行為」と定義しており、その特徴として、「社会性・連帯性」、「自主性・主体性」、「無償性・無給性」をあげている。また、国民生活白書（2000）では、「ボランティアの考え方として、ボランティアの最大公約数的な要素として『自発性：自らの意思に基づいて行動する』、『貢献性：（社会の一員として）他の人々や社会の福利を向上させる』の2点を考えており、ボランティア活動は基本的に無対価であり、自らの経済的利益を求めることが中心的な動機にはならない。」と定義されている。スポーツボランティアについては、文部省（2000）により、「地域におけるスポーツクラブやスポーツ団体において、報酬を目的としないで、クラブ・団体の運営や指導活動を日常的に支えたり、また、国際競技大会や地域スポーツ大会などにおいて、専門的能力や時間などを進んで提供し、大会の運営を支える人のこと」と定義されている。

一方で、近年スポーツボランティア活動に参加をすると、ウインドブレーカーなどの支給品や交通費などの支給が行われるイベントも多く見受けられる。これらはボランティアの特徴である「無償性・無給性」に反するという見方もあるが、これらは「報酬」ではなく「実費」もしくは「必要経費」となるとの見方もある。また近年、大会側から依頼を受け活動に参加する「依頼型ボランティア」が多く見受けられ、これらは「自主性・主体性」に反すると捉えられることがあるが、依頼型のボランティアであってもその参加動機構造は一般的なボランティアの参加動機構造と同様の傾向を示すことから、依頼されて活動に参加していても、「自主性・主体性」というボランティアの特徴は踏まえている（内藤，2009）ことから、ボランティアの定義を踏まえた活動であると捉えることもできる。このように、

近年ボランティアの実態は変化しており，ボランティアの特徴においても変化が生じてきていると考えられる．これらのことから，現在のボランティアを対象に研究を行うことは，ボランティアの新たな知見の獲得のために重要である．

本研究では，スポーツボランティアを「スポーツイベントにおいて，直接的な対価を求めず，専門的能力や時間などを進んで提供し，大会運営を支える人のこと」と定義する．

スポーツボランティアに関する研究は，松本（1999）をはじめとした参加動機に関する研究や長ヶ原ら（1991）をはじめとする継続要因に関する研究などの，ボランティアの行動に関する研究，武隈（1997）の，スポーツボランティアには，「スポーツへのボランティア」と「スポーツからのボランティア」の2種類があることを明らかにしたものなどの理論に関する研究，保井ら（2004）の障がい者スポーツ指導員の活動内容などの実態を把握する研究などの実態に関する研究，豊田・金森（2007）をはじめとするボランティアの意識変容に関する研究やそれに伴う教育に関する研究などが行われているが，その数はあまり多くなく，充分には研究がされていない．

ボランティアは，国民の社会参加意識が高まり，また行政もボランティア活動に注目するようになった1970年代以降に一般に浸透していき，1990年代に入ると，企業の社会貢献活動に対する関心が高まっていった．そういった背景からボランティア活動への関心が徐々に高まる中，国民がボランティアに注目することになったきっかけが，1995年に発生した阪神・淡路大震災である．多くの人々が，炊き出しや避難所での作業補助など多岐にわたって活動を行い，その活動が国民のボランティア活動に関する関心を大いに高めたことから，1995年は「ボランティア元年」と呼ばれている（国際文化フォーラム，2008）．

ボランティアは、「災害ボランティア」や子ども・青少年を対象に活動を行う「子どもボランティア」、「環境ボランティア」、「国際ボランティア」、「スポーツボランティア」など様々な種類が存在する。そういった様々なボランティア活動は、様々な効果を生み出すことが知られており、その一つが「心理的ウェルビーイング」である。心理的ウェルビーイングとは、人が心理的・社会的に最適な状態で機能していることであり、精神的に健康で、社会の一員としてやるべきことをし、健全に生きていることを意味している(浅川, 2012)。

川元・柴田(1998)は、自尊感情、はりあい感、活力感、達成感といった心理的ウェルビーイングは、ボランティア活動への関心、ボランティア活動経験といった意識・認知レベルの状態と行動レベルの状態によって異なる関連があることを明らかにしている。また、岡本(2010)は、ボランティア活動は生きがい感、日頃の活動満足度といった複数の心理的ウェルビーイング指標と関連を示し、ボランティア活動は心理的ウェルビーイングを比較的高めやすい活動であることを明らかにしており、ボランティア活動への参加と心理的ウェルビーイングについては関連性があることが示されている。しかしこれらの研究では、ボランティア活動に参加することによって心理的ウェルビーイングが向上するのか、元々ウェルビーイングが高い人がボランティア活動に参加するのかを明らかにしていない。ボランティア活動への参加は社会的にも経済的にも一定の余裕があることが前提となると考えられることから、これらの関係については、今後継続的な研究が求められる。

心理的ウェルビーイングは様々な要因との関連が指摘されているが、角田ら(2015)は、高齢者が人と人とのつながりに肯定的な感覚をもっていることと、心の健康には関連があることを明らかにし、さらに地域のつながりは高齢者の精神的健康を高めることを示唆し

ていることから、心理的ウェルビーイングは地域のコミュニティなど、集団と関連があることが考えられる。

集団への態度を測る指標としては、「センス・オブ・コミュニティ（以下、SOC と略す）」がある。SOC とは、コミュニティ心理学において、人と人とのつながりにおける肯定的な感覚のことであり、笹尾（2007）は、SOC の高さは幸福度に影響があることを明らかにしている。

一方、近年、Quality of Life（QOL）、つまり生活の質や健康といった分野に人々の関心が寄せられている。特にコロナ禍以降は「健康」、特に「こころの健康」という分野に人々の関心は多く寄せられている。2022年10月に厚生労働省より公表された健康日本21（第二次）最終評価報告書では、心の健康の維持・増進に関わる目標項目について、医療機関・公的機関への受診・相談が増加しているにもかかわらず、10年前と比較すると変化がなく、次期に向けた大きな課題とされている。また、「様々な要因によって、コロナ禍はこころの健康に無視できない悪影響を与えている可能性が考えられている」と報告している。こころの健康とは、「いきいきと自分らしく生きるための重要な条件である。具体的には、自分の感情に気づいて表現できること（情緒的健康）、状況に応じて適切に考え、現実的な問題解決ができること（知的健康）、他人や社会と建設的でよい関係を築けること（社会的健康）を意味している。人生の目的や意義を見出し、主体的に人生を選択すること（人間的健康）も大切な要素であり、こころの健康は『生活の質』に大きく影響するものである。こころの健康には、個人の資質や能力の他に、身体状況や社会経済状況、住居や職場の環境、対人関係など、多くの要因が影響し、なかでも、身体の状態とこころは相互に強く関係して

いる」(厚生労働省, 2000) ことが指摘されている。

これらのことから, コロナ禍において, ライフスタイルに大きな影響を受けている状況下では, 様々なレベルでの健康, ウェルビーイングに着目する必要がある。また, 先行研究により, ボランティア活動は心理的ウェルビーイングと関連をもつ活動であることが明らかになっていることから, ボランティア活動の参加者を対象に研究を行うことが必要であり, 近年定義や特徴が変化してきていると考えられるスポーツボランティアに着目することで, 新たな知見を獲得することができると考えられる。さらに, 心理的ウェルビーイングと関連があることが明らかになっている SOC に着目することで, ボランティアコミュニティと心理的ウェルビーイングとの関連を明らかにすることができ, 今後のスポーツボランティアマネジメントにも貢献できると考えられる。

第 2 節 本研究の目的

本研究の目的は, スポーツイベントボランティア活動とボランティアコミュニティへの SOC, および心理的ウェルビーイングとの関連を明らかにし, さらにボランティアコミュニティへの SOC と心理的ウェルビーイングとの関連を明らかにすることである。

第 2 章 先行研究・仮説

第 1 節 先行研究

第 1 項 スポーツボランティアに関する研究

スポーツボランティアに関する研究は長ヶ原（1991）をはじめとして、今日まで研究が進められ、1997 年に武隈が行動原理の解明こそが第一の課題と指摘して以降は、「参加動機」や「継続要因」を中心に研究がすすめられた（山下・行實，2015）。山下・行實が 2015 年までにスポーツボランティアについて論じられている論文を分類したところ、ボランティアの「理論」や「実態」に関する研究，参加動機やイメージ・ニーズといった「参加行動」に関する研究，「継続行動」に関する研究，「意識変容」に関する研究，まちづくりの効果についてや，スポーツボランティア団体の形成過程についての「その他」の研究に分けられることを明らかにしており，スポーツボランティアの実態や参加行動に主に焦点を置いて研究が進められてきている。

第 2 項 ボランティアと心理的ウェルビーイングに関する研究

心理的ウェルビーイングは，Ryff(1989)によって，「人格の成長」，「人生における目的」，「自律性」，「環境制御力」，「自己受容」，「積極的な他者関係」という 6 つの心理的機能から構成される概念として定義されており，人生全般にわたるポジティブな心理的機能といえる。また，これらの概念に基づいて慎重に尺度化を行い検討した Ryff & Keys (1995)の研究においては，6 つの心理的機能によって発達的変化のパターンに相違が見られることが確認されており，成人期全般にわたる多様な心理的变化を捉えるのに適していると考え

えられる（西田，2000）。

心理的ウェルビーイングな状態であることは2つの観点から捉えることができる。一つが、「主観的ウェルビーイング」であり、もう一つが「心理的ウェルビーイング」である。

「主観的ウェルビーイング」は、幸福や快樂といった結果に焦点を当てており、具体的には「抑うつ・不安のなさ」や、「人生に満足していること」が挙げられる。一方「心理的ウェルビーイング」は、主観的ウェルビーイングが情動状態のみに注目していることから、人間のウェルビーイングを包括的には捉えきれないと考えた Ryff (1989) によって提唱されたものであり、「結果」よりも「より良く生きるための過程」に焦点を当てている。具体的には自分が成長しつつあり、人生に目的をもっていて、自己決定し、温かい他者関係を築いているという感覚が挙げられる (Richard, Veronika and Edward, 2008; 伊藤, 2005)。

本研究においては、結果のみではなくその過程も含めてより包括的にウェルビーイングを捉えられる点から、心理的ウェルビーイングを用いる。

心理的ウェルビーイングの研究は国内でも様々な分野で進められており、西田 (2000) は成人女性の社会活動参加という家庭外での役割は、就労とは異なった形で心理的ウェルビーイング各次元に強く関連していることを明らかにしている。また、川元・柴田 (1998) は、自尊感情、はりあい感、活力感、達成感といった心理的ウェルビーイングは、ボランティア活動への関心、ボランティア活動経験といった意識・認知レベルの状態と行動レベルの状態によって異なる関連があることを明らかにしている。さらに、藤原ら (2005) が、北米における研究を概観し、高齢者のボランティア活動は高齢者自身の心理的な健康度を高めることを明らかにしていることから、ボランティア活動は心理的ウェルビーイング

を比較的高めやすい活動であるといえる（岡本，2010）。また，妹尾（2008）は，若者ボランティアを対象に，ボランティア経験がもたらす影響について調査し，ボランティア経験は自分自身の成長や活動経験による喜びなどの援助成果を得られることを明らかにしている。

第3項 ボランティアとSOCに関する研究

Sarason（1974）は，コミュニティとは，「人が依存することができ，たやすく利用が可能で，お互いに支援的なネットワークである」と定義し，また，コミュニティに対して人々が持つ態度を「センス・オブ・コミュニティ（SOC）」と命名した。SOCとは，McMillan & Chavis（1986）によって，「メンバーが持つ所属感，メンバーがメンバー同士あるいは集団に対して持っている重要な感覚，また，集団とともにコミットメントすることによってメンバーのニーズを満たすことができるという信念の共有」と定義されている。またSOCは「メンバーシップ：所属しているという感覚，または個人的なつながりの感覚を共有しているという感覚」，「影響力：グループに変化をもたらすこと，またグループがそのメンバーにとって重要であること」，「統合とニーズ：グループのメンバーシップを通じて受け取ったリソースによって，メンバーのニーズが満たされるという感覚」，「情緒的結合の共有：メンバー間のポジティブな交流，重要な出来事や問題を共有し解決すること，メンバーを称えること，コミュニティへの積極的参与と投資，メンバー間の精神的つながりの経験を通して培われ促進されていく」の4つの構成概念からなる（McMillan & Chavis，1986；植村，2012）。

SOC における「コミュニティ」には大きく二つあり、一つが地域社会または地域共同体といった「地理的コミュニティ」であり、もう一つが家族や学校、職場等の目に見える社会システムや、それらの社会システム間のネットワークのような目には見えないアイデンティティを共有した集団も含む「機能的コミュニティ」である（飯田，2014；越，2012）。

ボランティアコミュニティは、ボランティア活動を通して人々が集まり、ボランティア活動を行うことで育まれるコミュニティであり、「機能的コミュニティ」であるといえる。

Kerwin et al.（2015）は、小規模なスポーツイベントにおいて、ボランティア活動がボランティア集団への SOC を高めることを明らかにしている。

第 4 項 SOC と心理的ウェルビーイングに関する研究

SOC と心理的ウェルビーイングの研究には、SOC と心の健康には関連があることを明らかにした角田ら（2015）の研究や、SOC の高さは幸福度に影響があることを明らかにした笹尾（2007）の研究があり、SOC と心理的ウェルビーイングには関連があると考えられる。

第 5 項 先行研究のまとめ

ボランティア活動は心理的ウェルビーイングを高めやすい活動であること、ボランティア活動がボランティア集団への SOC を高めやすい活動であること、また、SOC と心理的ウェルビーイングには関連があると考えられることから、スポーツボランティア活動は心理的ウェルビーイングとの関連を示し、また SOC とも関連を示し、さらに SOC は心理的

ウェルビーイングと関連を示すと考えられる。

第 2 節 仮説および仮説モデルの設定

第 1 項 仮説の設定・検討

先行研究を踏まえ、本研究では 3 つの仮説を設定した。

先行研究において、ボランティア活動は心理的ウェルビーイングと関連があること、また、Littlejohn et al. (2016) が、スポーツイベントを知っている地域住民は、知らない住民に比べ幸福感やウェルビーイングが高いことを報告する際に、スポーツイベントそのものが幸福感を高めているのではなく、満足感が幸福感を高めていることを明らかにしていることを踏まえ、仮説 1 (H.1) として以下の仮説を設定した。

H.1 スポーツボランティア活動の満足度はボランティア参加者の心理的ウェルビーイングと関連がある

先行研究において、SOC のコミュニティにはボランティアコミュニティもなり得ること、また、スポーツイベントボランティア活動がボランティア集団への SOC を高めることが明らかになっていることを踏まえ、仮説 2 (H.2) として以下の仮説を設定した。

H.2 スポーツボランティア活動の満足度はボランティアコミュニティへの SOC と関連がある

先行研究において、SOC は心の健康と関連があること、また SOC は幸福度と関連があることを踏まえ、仮説 3 (H.3) として以下の仮説を設定した。

H.3 ボランティアコミュニティへの SOC はボランティア参加者の心理的ウェルビーイングと関連がある

第 2 項 仮説モデルの設定

先述の 3 つの仮説をもとに、図 1 のような仮説モデルを作成した。明らかにするのは「ボランティア満足度」と「心理的ウェルビーイング」の関連、「ボランティア満足度」と「SOC」の関連、「SOC」と「心理的ウェルビーイング」の関連である。

第 3 章 研究方法

第 1 節 測定尺度の設定

本研究では、以下の測定尺度を用いた。

第 1 項 SOC

「SOC」を測定する尺度は、Kerwin ら (2015) が「Sense of Community in Sport Scale (スポーツにおける SOC 尺度)」(Warner ら, 2013) をもとに作成した「a scale that measures sense of community among small-scale sport event volunteers (スポーツイベントボランティア SOC 尺度)」5 因子 15 項目の尺度を用いた (表 1)。

なお、Kerwin ら（2015）の項目は、英語で作成されているため、翻訳する必要があった。英語で作成された尺度をスポーツマネジメント研究者と大学院生によって英語から日本語に翻訳され、翻訳された項目の妥当性を確認するため、スポーツマネジメント研究者と複数の大学院生でディスカッションを行い、内容的妥当性を検討した。

また、質問項目における「リーダー、スタッフ」は、本研究では、「ボランティアを除く松本マラソン実行委員会などのスタッフ」と教示した。

第2項 心理的ウェルビーイング

「心理的ウェルビーイング」を測定する尺度は、「The structure of Psychological well-Being」（Ryff, 1989）をもとに作成された「心理的 well-being 尺度」（西田, 2000）の尺度を用いた。

なお、西田（2000）が作成した尺度は、[人格的成長][人生における目的][自律性][自己受容][環境制御力][積極的な他者関係]の6次元43項目からなるが、McGregor & Little（1998）は、[自己受容]と[環境制御力]の2下位尺度は心理的ウェルビーイングに相当する因子には含まれないことを明らかにしていることから、本調査では[自己受容]と[環境制御力]の2下位尺度を除外した4次元30項目を用いた（表2）。

なお、心理的ウェルビーイング尺度は、「現在のあなた自身についてお聞きします。以下のそれぞれの項目について、あなたのお考えに近い番号に○をつけてください。」と尋ねた。

SOC尺度と心理的ウェルビーイング尺度の測定は、「1. 全くあてはまらない」から

「5. 非常にあてはまる」の5段階リッカートスケール尺度で測定を行った。

第2節 調査の概要

第1項 調査対象

本調査の調査対象は、2022年11月13日に長野県松本市で行われた「松本マラソン2022」のボランティア約700名である。

第2項 調査対象大会の概要

本研究の対象は、2022年11月13日に行われた「松本マラソン2022」で活動したボランティアである。「松本マラソン2022」は、長野県松本市で「魅せたい三ガク都がここにある」を大会テーマに実施されているマラソンの大会で、2017年に第1回大会が開催され、2022大会で3回目の開催となるマラソンイベントである。

この大会は大会コンセプトに、『『する人』、『みる人』、『支える人』すべてが参加』とあるようにボランティアも大会の主役になること、また「世代を超えて、多くの市民・企業・団体が、ボランティアとして大会運営に参加し、松本市ならではのおもてなしで選手を迎える」とあり、またコースが周回ではなくワンウェイコースであることから、より多くの人がボランティアとして参加し、また多様なボランティアが参加すると考えられることから、偏りがなく、より一般的な結果を得られると判断した。

また、対象とした大会は本大会で3回目と開催数が少なく、大幅なコース変更も伴ったことから、経験を積んだボランティアやスタッフが少なく、よりボランティアの自主性や

ボランティア同士の助け合いが求められると考えられた。そのため、ボランティアの定義を踏まえており、ボランティアコミュニティをテーマにしている研究であるといった点において、本研究の対象に相応しいと判断した。また、この大会では、開催1か月前から研修会が行われており、ボランティア集団に所属している期間が存在することから、SOCを測る対象に適していると判断した。

第3項 調査時期

「松本マラソン2022」大会終了後の2022年12月上旬～中旬に調査を実施した。

第4項 調査方法

アンケート用紙を使用した質問紙調査とGoogleフォームによるWeb調査を併用して行った。

質問紙調査は、12月上旬に松本マラソン実行委員会事務局に調査用紙を配布。その後、実行委員会よりボランティア参加者に郵送にて配布。その後、郵送で回収を行った。

Web調査は、質問紙調査と同様の内容でGoogleフォームを作成し、インターネット上で回答を回収した。

配布数700部、回収数は質問紙調査133部、WEB調査90部の計223部、有効回答数は189部、有効回答率は84.8%であった。

第 5 項 調査項目

調査項目は、基本的属性（性別，年齢，居住地，過去のボランティア活動経験，活動場所，今大会のボランティア情報入手経路），活動満足度 1 項目，SOC 15 項目，心理的ウェルビーイング 30 項目である。

第 6 項 分析方法

分析方法は、4 つのステップで行った。まず 1 つ目のステップとして、調査対象者の個人的属性の単純集計を行った。2 つ目のステップとして、尺度の信頼性と妥当性を確認するため、確認的因子分析、およびクロンバックの α 係数を算出した。その際、確認的因子分析におけるモデルの適合度基準は、狩野・三浦（2007）を参考に、 χ^2/df （カイ二乗を自由度で除した値）が 3.00 以下、Goodness of Fit Index（以下、「GFI」と略す）が .90 以上、Comparative Fit Index（以下、「CFI」と略す）が .90 以上、Root Mean Square Error of Approximation（以下、「RMSEA」と略す）が .080 以下を示すモデルはあてはまりが良いという基準を採用した。3 つ目のステップとして、構造方程式モデリング（以下、SEM と略す）を行い、仮説モデルの検証を行った。4 つ目のステップとして、各尺度の因子に含まれる質問項目の平均得点を用い、個人的属性やスポーツボランティア活動への参加経験有無による各尺度構造の差異を F 検定（一元配置分散分析）によって分析した。分析には、統計パッケージ IBM SPSS Statistics 27 と IBM SPSS Amos 27 Graphics を用いた。

第 7 項 倫理

本研究の実施にあたり，大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科研究公正委員会研究倫理審査部会の審査と承認を得た（22-48）。

第 4 章 結果および考察

第 1 節 回答者の特性

第 1 項 個人的属性

表 3 には，本調査の回答者の個人的属性を示している。性別は男性が 42.9%，女性が 56.6%，無回答 0.5%であった。年齢は 50 代が 27%と最も多く，次いで 60 代が 22.8%であった。笹川スポーツ財団が 2018 年に行った調査でも 10 代から 70 代以上まで幅広い年代の人がスポーツボランティアを実施していることが明らかになっていることから，本研究のデータは偏りが少なく，より一般的なデータを得ることができたと考えられる。居住地は大会の開催場所である松本市内が 64.6%と最も多かった。

第 2 項 ボランティア活動

表 4 には，本調査の回答者のボランティア経験について示している。スポーツボランティア活動経験の有無は経験ありが 52.4%，経験なしが 47.6%だった。スポーツボランティア活動経験がありの人の，これまでのスポーツボランティア活動回数は 1～2 回が 41.4%と最も多く，次いで 3～5 回が 31.3%であった。スポーツボランティア活動経験がありの

人の、これまでに行ったスポーツボランティア活動（複数回答）は、審判など専門的な活動、運営や世話などを行う地域のスポーツイベントでの活動が 41.3%と最も多く、次いで審判、指導、運営や世話、施設管理などを行う日常的な活動が 14.8%、審判や専門的な活動、運営や世話などを行う全国・国際的なスポーツイベントでの活動は 8.5%だった。これらの結果から、この大会のスポーツボランティア参加者は初心者からベテランまで、日常的に活動を行っている人から大きな大会などで非日常的な活動を行っている人まで、多種多様な参加者が集まっていることが明らかとなった。

松本マラソンでのボランティア活動回数は、今回がはじめての活動の人が 52.4%と最も多かった。これは大会自体がまだ 3 回目と少ないことが影響していると考えられる。

今大会での活動場所は、エイドステーション・給水所で活動を行った人が 47.1%と最も多かった。また、今大会のボランティア活動の情報入手経路は、その他を除くと松本市の広報誌が 23.3%と最も多く、その他では「会社で誘われた」といった、職場での入手が多い結果となった。このことから、今回のボランティア参加者には、ある程度組織内のダイナミクスが働き、集合的な意識によって動機づけられて参加している人が含まれていることがわかり、ボランティアの特徴である「自主性・主体性」が変化していることが示唆された。

第 2 節 測定尺度の信頼性と妥当性

本調査で用いた測定尺度の妥当性を検証するために、確認的因子分析を行い、収束的妥当性および弁別的妥当性を検討するために、因子負荷量、AVE（Average Variance

Extracted), 相関係数を分析した。

第 1 項 SOC 尺度

SOC 尺度のモデル適合度は, $\chi^2/df=2.485$, $GFI=.887$, $CFI=.941$, $RMSEA=.089$ (表 5) となり, GFI ならびに $RMSEA$ が基準値を満たさなかった。その原因の一つとして, 1 項目において因子負荷量が .50 を下回る結果であったことが考えられる。具体的には, 「何か問題が発生した場合には, その解決に協力することができる (.456)」であった。Hair et al. (2010) は, 一般的に .50 以上の因子負荷量の値が重要だと指摘する。そのため上記の 1 項目を削除し, 再度確認的因子分析を行った結果, $\chi^2/df=2.186$, $GFI=.907$, $CFI=.959$, $RMSEA=.079$ (表 6) となり, すべての基準値を満たしたことから, 上記 1 項目を削除してその後の分析を進めた。

次に, 収束的妥当性と弁別的妥当性の検討を行った (表 7・8)。各変数の AVE を .50 以上を基準 (Fornell and Larcker, 1981) に妥当性の検討を行った結果, すべての変数において基準値を上回る結果となった。したがって, 構成概念の収束的妥当性を有していることが示された。また, 1 次因子間の相関係数の 2 乗が各要因の AVE を超えないことが確認されたことから, 弁別的妥当性が確認することができた。

また, 本調査で用いた測定尺度の信頼性を確認するために, クロンバック (Cronbach) の α 係数を算出した。その結果, 本調査における SOC 尺度の信頼性は, 「経営上の考慮」 $\alpha = .896$, 「共通の関心」 $\alpha = .836$, 「経営判断の公平性」 $\alpha = .925$, 「リーダーシップの機会」 $\alpha = .641$, 「ソーシャルスペース」 $\alpha = .887$ であったことから, 「リーダーシップの機

会」のみにおいて尺度の内的整合性が高いとされる.70 (Nunnally and Bernstein, 1994) を下回る数値となったが、「リーダーシップの機会」は 2 項目からなり、項目数が少ないとクロンバックの α 係数は低くなる傾向があることから、許容範囲内であると判断した。CR 値は、許容範囲の.60 以上 (Bagozzi and Yi, 1988) をすべての変数において上回る結果となったことから、一定の信頼性を有していると判断した。

第 2 項 心理的ウェルビーイング尺度

心理的ウェルビーイング尺度のモデル適合度は、 $\chi^2/df=3.221$, $GFI=.658$, $CFI=.720$, $RMSEA=.109$ (表 9) となり、すべての適合指数が基準値を満たさなかった。ここでも、30 項目中 4 項目において因子負荷量が.50 を下回る結果であったことが原因と考えられる。具体的には、「何かを判断するとき、社会的な評価よりも自分の価値観を優先する (.258)」、「私は、自分の行動は自分で決める (.359)」、「自分の行動を決定するとき、社会的に認められるかどうかをまず考える (.433)」、「習慣にとらわれず、自分自身の考えに基づいて行動している (.232)」であった。これらはすべて「自律性」因子の変数であった。上記の基準値に基づいてこれら 4 項目を削除し、再度確認的因子分析を行った結果、 $\chi^2/df=2.787$, $GFI=.747$, $CFI=.818$, $RMSEA=.097$ (表 10) となり、 χ^2/df は基準値を満たし、また、小杉・清水 (2014) によると、 $RMSEA$ が 0.1 以下であればあてはまりが良いとされていることから、許容範囲内である値を示した。しかし、 GFI ならびに CFI は基準値を満たさず、当てはまりがいいとはいえない結果となった。 χ^2/df ならびに $RMSEA$ においては数値が改善されたことから、上記 4 項目を削除してその後の分析を進めた。

次に、収束的妥当性と弁別的妥当性の検討を行った（表 11・12）。妥当性の検討を行った結果、すべての変数において基準値を上回る結果となったことから、構成概念の収束的妥当性を有していることが示された。また、弁別的妥当性についても確認することができた。

また、本調査で用いた測定尺度の信頼性を確認するために、クロンバック（Cronbach）の α 係数を算出した。その結果、本調査における心理的ウェルビーイング尺度の信頼性は、「人格的成長」 $\alpha = .899$ 、「人生における目的」 $\alpha = .903$ 、「自律性」 $\alpha = .807$ 、「積極的な他者関係」 $\alpha = .788$ であったことから、すべて基準値を上回り、CR 値についてもすべての変数において .60 を上回った。

以上より、各尺度の信頼性と妥当性の検証の結果、一部検討する余地がある結果となったものの、一定の信頼性と妥当性を確認することができた。

第 3 節 仮説モデルの検証

図 2 は、仮説モデルの検証結果を示している。SEM を用い、モデルの適合度を算出したところ、 $\chi^2/df = 2.073$, GFI = .698, CFI = .837, RMSEA = .076 となった。 χ^2/df と RMSEA はどちらも基準値を満たす結果となった。GFI と CFI は基準値を満たすことができなかったが、CFI についてはおおむね基準値に近い数値となり、また他の指標が基準値を上回ったことから、適合度は問題ないと判断し分析を進めた。モデルの決定係数 (R^2) は SOC の 41%、心理的ウェルビーイングの 23% を説明している。

3 つの仮説検証結果については以下のとおりである。

仮説 1 は、「ボランティアの活動満足度 ($\beta = .204$, n.s.)」と「心理的ウェルビーイング」には関連がないことが確認された。よって、仮説 1 は支持されなかった。スポーツイベントの満足感が幸福感を高めていることは先行研究 (Littlejohn et al., 2016) で明らかにされているが、スポーツボランティアの活動満足度においては同様の結果は示されなかった。スポーツイベントを認知している人とスポーツイベントボランティアの参加者では、スポーツイベントへの関与の仕方によって異なると考えられる。

仮説 2 は「ボランティア満足度 ($\beta = .644$, $p < .001$)」と「SOC」には関連があることが示された。このことから、仮説 2 は採択された。この結果は、先行研究を支持するものであり、スポーツイベントボランティア活動で満足することは、ボランティアコミュニティでの SOC と関連があることが明らかとなった。松本マラソンは「ボランティアも大会の主演」となり、また 3 回目という数少ない開催、コース変更なども伴ったことから、ボランティア間でより活発的に意見交換を行っていたり、お互いを支え合う活動になっていたと考えられる。

仮説 3 は、「SOC ($\beta = .327$, $p < .01$)」と「心理的ウェルビーイング」には関連があることが示された。このことから、仮説 3 は採択された。これも SOC は心理的ウェルビーイングと関連があるという先行研究を支持する結果となった。このことから、コミュニティへの所属感や人とのつながりを感じられることは、心理的ウェルビーイングと関連があり、またそのコミュニティにはボランティアコミュニティもなり得ることが明らかとなった。

第4節 個人的属性やスポーツボランティア活動への参加経験有無による各尺度構造の違い

次に、各尺度の因子に含まれる質問項目の平均得点を用い、個人的属性やスポーツボランティア活動への参加経験有無による各尺度構造の差異をF検定（一元配置分散分析）によって分析した。この分析に独立変数として用いた項目は、性別、年齢、過去のスポーツボランティア活動経験の有無である。

第1項 性別によるSOC構造・心理的ウェルビーイング構造の因子得点の平均の比較

性別によるSOC構造の差異は、すべての因子について有意な差は認められなかった（表13）。また心理的ウェルビーイング構造においても、すべての因子で有意な差が認められなかった（表14）。これは今大会でのボランティア活動は男女で役割を分けることが少なかったことから、性差で有意な差が認められなかったと考えられる。

第2項 年齢によるSOC構造・心理的ウェルビーイング構造の因子得点の平均の比較

年齢によるSOC構造の差異として、70代以上が「共通の関心」因子の値が高いという差が統計的に有意に認められた。その他のSOC因子についての違いは認められなかった（表15）。「共通の関心」因子は、「ボランティアに参加することで、同じ思いをもった仲間を得ることができる」や「松本マラソンのボランティアに参加すると、自分の居場所があるように感じる」といった項目が含まれていることから、70代以上の参加者は松本マラ

ソンのボランティア集団に対し、より強く自分と似た価値観の集団であり、そこに居場所があると感じていることが明らかとなった。

また、心理的ウェルビーイング構造においても 70 代以上が「自律性」因子の値が高いという差が有意に認められた。その他の心理的ウェルビーイング因子についての違いは認められなかった（表 16）。「自律性」因子は「自分の生き方を考えるとき、人の意見に左右されやすい（逆転項目）」や「重要なことを決めるとき、他の人の判断に頼る（逆転項目）」といった項目が含まれていることから、70 代以上の参加者は、より強く自分の意思をもっていることが明らかとなった。

第 3 項 スポーツボランティア活動経験の有無による SOC 構造・心理的ウェルビーイング構造の因子得点の平均の比較

スポーツ活動経験の有無による SOC 構造の差異として、経験ありが「共通の関心」因子の値が高いという差が統計的に有意に認められた。また、「リーダーシップの機会」因子においても経験ありが高いという差が統計的に有意に認められた。その他の SOC 因子についての違いは認められなかった（表 17）。「共通の関心」因子に有意な差が認められたこと、またこの因子には、自分の居場所があると感じるといったような項目が含まれることから、スポーツボランティア活動経験がありの方がより強くボランティア集団へのつながりを感じていることが明らかとなった。また、「リーダーシップの機会」因子は「松本マラソンの運営について、私は影響力を持っている」や「何か問題が発生した場合には、その解決に協力することができる」という項目が含まれていることから、活動経験ありの方が、より

ボランティア集団において役割があると感じ、その集団の一員であると感じていることが明らかとなった。これは、スポーツボランティア活動を経験することで、より活動の知識や自信を得ることが可能になり、それらを発揮することができると感じるからであると考えられる。

また、心理的ウェルビーイング構造においては、「自律性」因子にのみ有意な差が認められ（表 18）、「自律性」因子は自らの意志をもっているといった項目が含まれることから、活動経験がありの方が、より自主性をもってボランティアに参加していることが明らかとなった。このことから、ボランティアの特徴である「自主性」は初めから持っているものでもあるが、経験を積むことでより得られるものでもあると考えられる。

第 5 章 結論

第 1 節 本研究のまとめ

本研究の目的は、スポーツイベントボランティア活動の満足度と SOC、および心理的ウェルビーイングとの関連を明らかにし、さらに SOC と心理的ウェルビーイングとの関連を明らかにすることであった。具体的には、「スポーツボランティア活動の満足度はボランティア参加者の心理的ウェルビーイングと関連がある」、「スポーツボランティア活動の満足度はボランティアコミュニティへの SOC と関連がある」、「ボランティアコミュニティへの SOC はボランティア参加者の心理的ウェルビーイングと関連がある」という 3 つの仮説からなる仮説モデルを設定し、分析によって検証を行った。

SEMの結果から、「スポーツイベントボランティア満足度」と「心理的ウェルビーイング」との関連は確認されず、「SOC」とのみ関連を示し、「SOC」と「心理的ウェルビーイング」にも関連があることが示された。つまり、スポーツイベントボランティア活動を行い、満足すること（ボランティア満足度）は、ボランティア参加者がそのボランティア集団への所属意識（SOC）を感じることにつながることが明らかとなった。また、ボランティア集団への所属意識を感じることは、人生における目的をもつことや成長し続けたいと感じること、といったようなこころの健康（心理的ウェルビーイング）を感じることにつながることが明らかとなった。

また、個人の属性の各尺度構造の差異を分析したところ、性別では両尺度で有意な差は認められず、年齢別ではSOC尺度では「共通の関心」因子で、心理的ウェルビーイング尺度では「自律性」因子においてのみ有意な差が認められた。両尺度とともにそれぞれの因子において、70代以上が高い値を示した。このことから、70代以上の参加者の方が、他の年代の参加者に比べ、よりSOCを感じ、またより心理的ウェルビーイングを感じることを示唆された。

また、スポーツボランティア活動経験の有無別では、SOC尺度では、「共通の関心」因子と「リーダーシップの機会」因子で、心理的ウェルビーイング尺度では「自律性」因子で有意な差が認められた。両尺度ともにそれぞれの因子において、経験ありが高い値を示した。このことから、スポーツボランティア活動経験がある参加者の方が、経験がない参加者と比べて、よりSOCを感じ、またより心理的ウェルビーイングを感じることを示唆された。また、心理的ウェルビーイング構造において、活動経験がありの方が、より自主

性をもってボランティアに参加していることが明らかとなり、ボランティアの特徴である「自主性」は経験を積むことでより得られるものでもあると考えられることから、「初めから自主性がある」だけではなく、「経験することでよりもつことができる」といった点で、近年その特徴に変化が生じてきていることが示唆された。

これらのことから、スポーツイベント活動を行い、満足することと、ボランティア参加者がそのボランティア集団への所属意識を感じることは関連があり、それらは 70 代以上の参加者、またスポーツボランティア活動経験がある人の方がより強く感じていることが明らかとなった。また、ボランティア集団への所属意識を感じることは、人生における目的をもつことや成長し続けたいと感じること、といったようなこころの健康を感じることは関連があり、それらは 70 代以上の参加者、またスポーツボランティア活動経験がある人の方がより強く感じていることが明らかとなった。

第 2 節 インプリケーション

本研究の結果から、個人それぞれの目的のもと参加したボランティアが、ボランティア活動を行い満足することは、ボランティアコミュニティへの SOC と関連がある、またボランティア集団への SOC を感じることは、心理的ウェルビーイングと関連があることから、スポーツイベントにおいてボランティアの活動満足度を高められるよう活動内容を工夫することはもちろんであるが、所属感やつながりといったものを感じられるよう活動内容やグループ分けを行う、大会当日にスムーズに仲間と活動ができるよう事前に研修を行うなどを考慮した取り組みが必要であると考えられる。また、SOC 尺度において 20 代以

下の参加者の平均値がどの因子においても低く，ほとんどの因子が年齢により平均値が高まっていくことから，若い世代が SOC を感じられるよう工夫していく必要があると考えられる．

第 6 章 研究の限界と今後の展望

本研究では，スポーツボランティア満足度と SOC，スポーツボランティア満足度と心理的ウェルビーイング，SOC と心理的ウェルビーイングには関連があることが明らかとなったが，これらの関係性については検討することができず，また本研究では大会終了後のみの調査となったため，その変化については明らかにすることができなかった．今後はそれらの関係性や変化を明らかにし，スポーツボランティアの新しい知見の獲得につなげたい．

また本研究において，ボランティアの特徴について変化が生じてきていることが明らかとなったため，今後はその定義や特徴についてもさらに知見を深め，スポーツボランティアの在り方について研究を重ねていきたい．

参考文献

- 1) 浅川希洋志 (2012) 楽しさと最適発達の現象学 鹿毛雅治 (編) モチベーションをまなぶ12の理論 金剛出版 : p177-213
- 2) Chavis, D.M. , Hogge, J.H. , McMillan, D.W. , & Wandersman, A. (1986) Sense of community through Brunswik's lens : A first look. *Journal of Community psychology*, 14 (1) : p 24-40
- 3) 長ヶ原誠・山口泰雄・野川春夫・菊池秀夫 (1991) スポーツイベントのマネジメントに関する研究 (2) : ボランティアの継続意欲の視点から. 鹿屋体育大学学術研究紀要, 6 : p69-75
- 4) Fornell, C., and Larcker, D. (1981) Evaluating structural equation models with unobservable variables and measurement error. *Journal of Marketing Research*, 18 (1) : p39-50
- 5) 藤原佳典・杉原陽子・新開省二 (2005) ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響 : 地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義. *日本公衛誌*, 52 (4) : p293-307
- 6) Hair, J. F., Black, W.C., Babin, B. J., and Anderson, R.E. (2010) *Multivariate data analysis : A global perspective (7th ed.)* . Prentice Hall, Upper Saddle River, NJ, US.
- 7) 飯田香織 (2014) コミュニティ心理学におけるコミュニティの定義とコミュニティ心理学の独自性. *立命館産業社会論集*, 49 (4) : p79-99

- 8) 伊藤正哉・小玉正博 (2005) 自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情がwell-beingに及ぼす影響の検討. 教育心理学研究, 53 : p74-85
- 9) 狩野裕・三浦麻子 (2007) グラフィカル多変量解析 (増補版). 現代数学社 : 京都
- 10) 川元克秀・柴田博 (1998) ボランティア活動への関心とその経験が参加者の心理的 Well-being に及ぼす影響. 福祉教育・ボランティア学習研究年報, 3 (2) : p69-91
- 11) 清宮孝文・依田充代・門屋貴久・阿部征大 (2021) 体育系大学生のスポーツボランティアに対するイメージの類型化 : スポーツボランティア活動に「意欲的な学生」と「意欲的ではない学生」の特徴に着目して. 日本体育大学紀要, 50 : p1019-1029
- 12) 越良子 (2012) 学級コミュニティ感覚と学級内相互作用の関連 : ソーシャルサポートを指標として. 上越教育大学研究紀要, 31 : p75-82
- 13) 小杉考司・清水裕士 (2014) M-plusとRによる構造方程式モデリング入門. 北大路書房 : 京都
- 14) 小谷直道 (1999) 『市民活動時代のボランティア』中央法規出版
- 15) 公益財団法人国際文化フォーラムホームページ「ひだまり」『身近になったボランティア活動』2008年9月 <https://www.tif.or.jp/hidamari/backnumber.html> (2022年12月28日参照)
- 16) 江維豪・正田悠 (2021) 大学生の主観的 Well-being と心理的 Well-being に関するモデル構築. 日本認知科学会第38回大会, p264-268

17) 厚生労働省 (2000) 健康日本 21 「休養・こころの健康」

https://www.mhlw.go.jp/www1/topics/kenko21_11/b3.html#A31 (2023年2月10日

アクセス)

18) 厚生労働省 (2022) 健康日本 21 (第二次) 最終評価報告書

19) 桑山碧実・笹尾敏明 (2020) 都市部の在日フィリピン人の母親の心理的ウェルビー

イングと養育に関する自己効力感における心理社会的エコロジカル要因の役割. 国際基督

教大学学報. I-A 教育研究紀要論文, 62 : p21-37

20) Marijke T, Meagan L, Ryan S and Laura W. (2016) Sport Events and

Residential Happiness: The Case of Two Non-Mega Sport Events. Journal of Global

Sport Management, 1 (3-4) : p90-109

21) 松岡宏高、小笠原悦子 (2002) 非営利スポーツ組織を支えるボランティアの動機.

体育の科学, 52 (4) : p277-284

22) 松本耕二 (1999) スポーツ・ボランティアの類型化に関する研究: 障害者スポーツ

イベントのボランティアに着目して. 山口県立大学社会福祉学部紀要, 5 : p11-19

23) 松本耕二・渡辺泰弘 (2015) 市民型スポーツボランティアの地域愛着とチームイメ

ージとの関連. 広島経済大学研究論集, 38 (2) : p13-20

24) 松本マラソン2022ホームページ <https://www.matsumoto-marathon.jp/>

(2023年1月17日参照)

- 25) McGregor, I. , & Little, B. R. (1998) Personal projects, happiness, and meaning : On doing well and being yourself. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74 : p494-512
- 26) 文部科学省 (2010) スポーツ立国戦略.
- 27) 元嶋菜美香・杉山佳生 (2022) スポーツボランティアの参加・継続要因に関する研究動向 : 定義と活動実態の乖離に着目して. *生涯スポーツ学研究*, 19 (1) : p27-36
- 28) 内閣府 (2000) 国民生活白書
- 29) 内藤正和 (2009) 地域のスポーツイベントにおけるボランティア活動に関する研究 : 依頼型のボランティアに着目して. *愛知学院大学心身科学部紀要*, 5 (7-15) : p7-15
- 30) 日本 WHO 協会ホームページ「世界保健機関 (WHO) 憲章とは」. 公益財団法人 日本 WHO 協会
- 31) 日刊スポーツ「大会ボランティアが表彰 延べ7万 6186 人、最年長は 91 歳 (2021 年 8 月 8 日)」
<https://www.nikkansports.com/olympic/tokyo2020/news/202108080001260.html>
(2022 年 12 月 28 日参照)
- 32) 西田裕紀子 (2000) 成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究. *教育心理学研究*, 48 : p433-443
- 33) NPONNEWS ホームページ「東京オリンピックボランティアのレガシーは参加者の意識や行動への変化」 <https://nponews.jp/volunteer/tokyo-olympics/#:~:text=> (2022

年 12 月 28 日参照)

34) 岡本秀明 (2010) 市川市における高齢者の活動と心理的 well-being の関連. 和洋女子
大学紀要, 50 : p41-54

35) 小塩真司 (2019) SPSS と Amos による心理・調査データ解析 因子分析・共分散
構造分析まで. 東京図書

36) Richard M. Ryan, Veronika Huta and Edward L. Deci (2008) LIVING WELL: A
SELF-DETERMINATION THEORY PERSPECTIVE ON EUDAIMONIA. Journal of
Happiness Studies, 9 : p139-170

37) Ryff, C. D. (1989) Happiness is everything, or is it? Explorations on the
meaning of psychological well-being. Journal of Personality and Social Psychology,
57 : p1069-1081

38) Ryff, C. D., & Keys, C. L. (1995) The structure of psychological well-being
revisited. Journal of Personality and Social Psychology, 69, : p719-727

39) Sarason, S.B. (1974) The Psychological Sense of Community: Prospects for a
community psychology. Jossey-Bass.

40) 笹尾敏明 (2007) コミュニティ感覚 日本コミュニティ心理学会 (編) コミュニテ
ィ心理学ハンドブック. 東京大学出版会, p115-129

41) 笹川スポーツ財団 (2018) スポーツライフ・データ 2018—スポーツライフに関する
調査報告書. 財団法人 笹川スポーツ財団.

42) 笹川スポーツ財団 (2020) スポーツライフ・データ 2020—スポーツライフに関する調査報告書. 財団法人 笹川スポーツ財団

43) 笹川スポーツ財団ホームページ「スポーツボランティアとは? スポーツボランティアの種類と実施状況」

https://www.ssf.or.jp/thinktank/volunteer/volunteer_list.html#:~:text= (2023年1月17日参照)

44) 世界ボランティア宣言 (1990) ボランティア活動推進国際協議会総会

45) 妹尾香織 (2008) 若者におけるボランティア活動とその経験効果. 花園大学社会福祉学部研究紀要, 16 : p3-42

46) Shannon K, Stacy W, Matthew W and Julie S. (2015) Exploring sense of community among small-scale sport event volunteers. *European Sport Management Quarterly*, 15 (1) : p77-92

47) 柴田陽介・早坂信哉・野田龍也・村田千代栄・尾島俊之 (2011) する・見る・支えるスポーツ活動と主観的健康感の関連. *運動疫学研究* 13 (1) : p44-50

48) Stacy M.W., Matthew W. and Shannon K. (2013) Examining Sense of Community in Sport: Developing the Multidimensional 'SCS' Scale. *Journal of Sport Management*, 27 : p349-362

49) 角田英恵・桂敏樹・星野明子・臼井香苗 (2015) 新興住宅地の開発が進む地域における高齢者の心の健康に関連する要因: コミュニティ感覚, 居住環境を含む検討. *日農医誌*, 64 (2) : p140-154

- 50) スポーツ庁（2017）第2期スポーツ基本計画.
- 51) スポーツ庁（2022）第3期スポーツ基本計画.
- 52) 社会福祉法人那覇市社会福祉協議会ホームページ「ボランティアの種類と一覧」
<http://www.nahasyakyo.org/service/volunteer/1457616065/>（2022年12月28日参照）
- 53) 武隈晃（1997）「スポーツボランティア」概念の周辺. 鹿児島大学教育学部研究紀要, 人文・社会科学編, 48 : p57-70
- 54) 田村隆宏・木村信貴・三井理愛・松瀬誉幸（2011）大学生の心理的well-being に及ぼすアルバイト活動の影響. 鳴門教育大学研究紀要, 26 : p43-52
- 55) 東京都オリンピック・パラリンピック調整部ホームページ「東京2020大会におけるボランティア」 <https://www.2020games.metro.tokyo.lg.jp/index.html>（2023年1月17日参照）
- 56) 豊田則成・金森雅夫（2007）スポーツ・ボランティアを経験することの意味とは？びわ湖大学駅伝にボランティア参加した本学学生の「語り」から. びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 4 : p9-18.
- 57) 植村勝彦（2012）現代コミュニティ心理学 理論と展開. 東京大学出版会, 4 : p181-194, 29-43, 6-17, 166
- 58) 山田耕生（2022）日本における市民マラソン大会の動向と今後の展望に関する考察. 千葉商大紀要, 59（3） : p129-141
- 59) 山下博武・行實鉄平（2015）スポーツ・ボランティアに関する研究動向：スポーツ経営学からの批判的考察. 徳島大学人間科学研究, 23 : p39-55

60) 保井俊英・永田隆子・田中美紀・藤原進一郎（2004）「障害者スポーツ指導員」資格取得者の現状について(2)：ボランティア活動者の特徴．武庫川女子大学紀要人文・社会科学編，52：p75-83

61) 全国社会福祉協議会ホームページ <https://www.shakyo.or.jp/index.html>（2023年1月17日参照）

図表

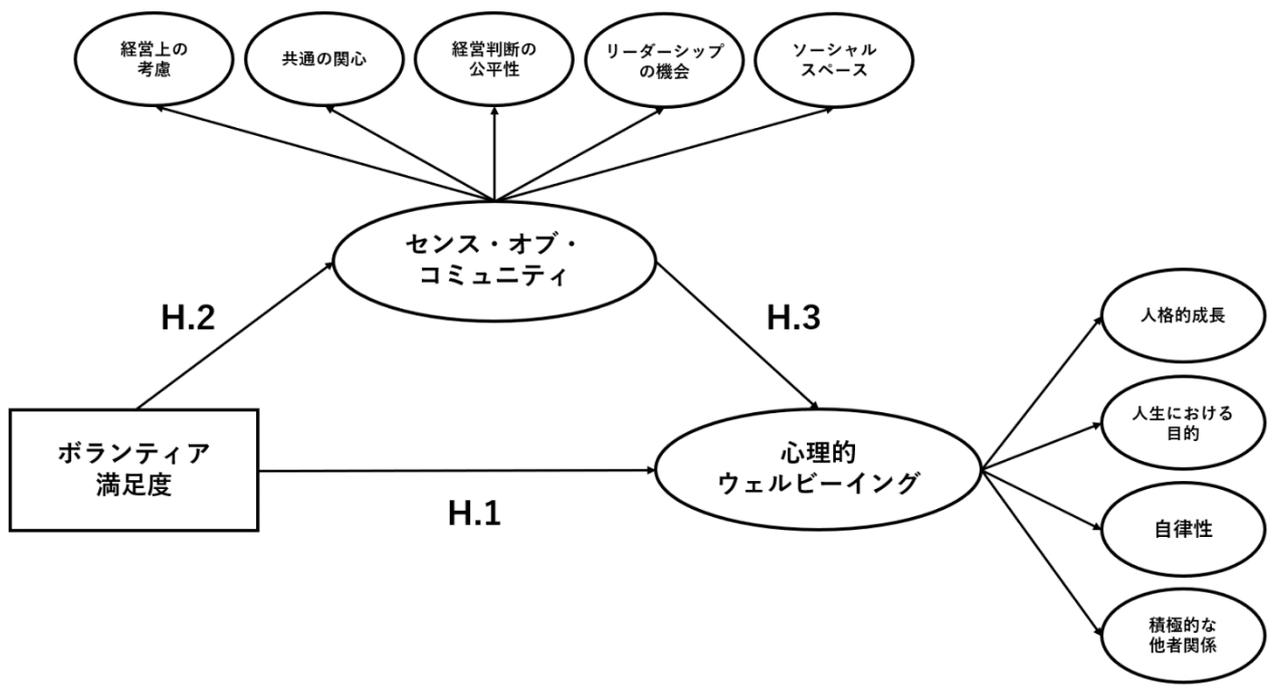


図 1 仮説モデル

表 1 本研究で用いた SOC 尺度

因子	項目
経営上の考慮	松本マラソンのリーダーたちは、ボランティアを大切に思っている 松本マラソンのリーダーたちは、ボランティアをサポートしてくれる 松本マラソンのリーダーと気さくに話ができる
共通の関心	松本マラソンの他のボランティアと価値観が似ている 松本マラソンのボランティアに参加すると、自分の居場所があるように感じる ボランティアに参加することで、同じ思いをもった仲間を得ることができる
経営判断の公平性	松本マラソンで働くスタッフは、みんなのためになる様に決定をしてくれる 松本マラソンで働くスタッフは、公正な判断をしている 松本マラソンで働くスタッフは、決断を下す際にみんなの希望を考慮している
リーダーシップの機会	何か問題が発生した場合には、その解決に協力することができる 松本マラソンの運営について、私は影響力を持っている 松本マラソンで行われることについては意見を言うことがある
ソーシャルスペース	松本マラソンに行くボランティア同士が交流できる場がある 松本マラソンに行く他のボランティアと交流できる場があることを認識している 松本マラソンは私が他のボランティアと交流する場を作っている

表 2 本研究で用いた心理的ウェルビーイング尺度

因子	項目
人格的成長	<p>これからも、私はいろいろな面で成長し続けたいと思う 新しいことに挑戦して、新たな自分を発見するのは楽しい 私には、もう新しい経験や知識は必要ないと思う これ以上、自分自身を高めることはできないと思う 自分らしさや個性を伸ばすために、新たなことに挑戦することは重要だと思う 私は、新しい経験を積み重ねるのが、楽しみである 私の能力は、もう限界だと思う 私の人生は、学んだり、変化したり、成長したりする連続した過程である</p>
人生における目的	<p>私は現在、目的なしにさまよっているような気がする 私の人生にはほとんど目的がなく、進むべき道を見いだせない 本当に自分のやりたいことが何なのか、見出せない 自分がどんな人生を送りたいのか、はっきりしている 私はいつも生きる目標を持ち続けている 私は、自分が生きていることの意味を見出せない 私の人生は退屈で、興味がわからない 私は、自分の将来に夢を持っている</p>
自律性	<p>私は何かを決めるとき、世間からどうみられているかとても気になる 重要なことを決めるとき、他の人の判断に頼る 自分の生き方を考えるとき、人の意見に左右されやすい 自分の考え方は、そのときの状況や他の人の意見によって、左右されがちである 何かを判断するとき、社会的な評価よりも自分の価値観を優先する 私は、自分の行動は自分で決める 自分の行動を決定するとき、社会的に認められるかどうかをまず考える 習慣にとらわれず、自分自身の考えに基づいて行動している</p>
積極的な他者関係	<p>私は、あたたかく信頼できる友人関係を築いている 他者との親密な関係を維持するのは、面倒くさいことだと思う 私はこれまでに、あまり信頼できる人間関係を築いてこなかった 私は他者というと、愛情や親密さを感じる 私は他者に強く共感できる 自分の時間を他者と共有するのはうれしいことだと思う</p>

表 3 個人の属性

項目	n = 189	
	n	%
性別		
男性	81	42.9
女性	107	56.6
無回答	1	0.5
年齢		
10代	1	0.5
20代	14	7.4
30代	13	6.9
40代	35	18.5
50代	51	27
60代	43	22.8
70代	28	14.8
80代	3	1.6
90代	1	0.5
お住まい		
松本市内	122	64.6
長野県(松本市を除く)	64	33.9
長野県外	3	1.6

表 4 ボランティア活動

項目	n = 189	
	n	%
スポーツボランティア活動経験の有無		
あり	99	52.4
なし	90	47.6
スポーツボランティア活動経験回数		
1～2回	41	41.4
3～5回	31	31.3
6～9回	8	8.1
10回以上	19	19.2
活動内容(複数回答)		
日常的な活動	28	14.8
地域のスポーツイベント	78	41.3
全国・国際的なスポーツイベント	16	8.5
松本マラソンでのボランティア活動回数		
はじめて	99	52.4
2回目	27	14.3
3回目	42	22.2
4回目	7	3.7
無回答	14	7.4
活動場所		
スタート会場	22	11.6
コースサポート	49	25.9
エイドステーション・給水所	89	47.1
フィニッシュ会場	22	11.6
無回答	7	3.7
情報入手経路(複数回答)		
松本市のHP	12	6.3
松本マラソン2022 HP	27	14.3
松本マラソン2022公式SNS	9	4.8
松本市の広報誌	44	23.3
家族や友人などに誘われて	7	3.7
その他	105	55.6

表 5 SOC 尺度の確認的因子分析：モデル適合指標

指標	適合度	基準値
χ^2/df	2.485	≤ 3.000
GFI	.887	$\geq .900$
CFI	.941	$\geq .900$
RMSEA	.089	$\leq .080$

表 6 SOC 尺度の確認的因子分析：モデル適合指標（修正後）

指標	適合度	基準値
χ^2/df	2.186	≤ 3.000
GFI	.907	$\geq .900$
CFI	.959	$\geq .900$
RMSEA	.079	$\leq .080$

表 7 本調査における SOC 尺度の確認的因子分析の結果

因子	項目	因子負荷量	α 係数	AVE	CR
経営上の考慮			.896	.956	.985
	松本マラソンのリーダーたちは、ボランティアを大切に思っている	.927			
	松本マラソンのリーダーたちは、ボランティアをサポートしてくれる	.947			
	松本マラソンのリーダーと気さくに話ができる	.735			
共通の関心			.836	.927	.974
	松本マラソンの他のボランティアと価値観が似ている	.758			
	松本マラソンのボランティアに参加すると、自分の居場所があるように感じる	.838			
	ボランティアに参加することで、同じ思いをもった仲間を得ることができる	.795			
経営判断の公平性			.925	.966	.989
	松本マラソンで働くスタッフは、みんなのためになる様に決定をしてくれる	.889			
	松本マラソンで働くスタッフは、公正な判断をしている	.910			
	松本マラソンで働くスタッフは、決断を下す際にみんなの希望を考慮している	.893			
リーダーシップの機会			.641	.799	.887
	松本マラソンの運営について、私は影響力を持っている	.768			
	松本マラソンで行われることについては意見を言うことがある	.615			
ソーシャルスペース			.887	.937	.978
	松本マラソンに行くボランティア同士が交流できる場がある	.872			
	松本マラソンに行く他のボランティアと交流できる場があることを認識している	.950			
	松本マラソンは私が他のボランティアと交流する場を作っている	.743			

表 8 本調査における SOC 尺度の因子間相関

因子	1	2	3	4	5
1 経営上の考慮	1.000				
2 共通の関心	.571	1.000			
3 経営判断の公平性	.768	.697	1.000		
4 ソーシャルスペース	.300	.535	.388	1.000	
5 リーダーシップの機会	.131	.329	.214	.536	1.000

表 9 心理的ウェルビーイング尺度の確認的因子分析：モデル適合指標

指標	適合度	基準値
χ^2/df	3.221	≤ 3.000
GFI	.658	$\geq .900$
CFI	.720	$\geq .900$
RMSEA	.109	$\leq .080$

表 10 心理的ウェルビーイング尺度の確認的因子分析：モデル適合指標（修正後）

指標	適合度	基準値
χ^2/df	2.787	≤ 3.000
GFI	.747	$\geq .900$
CFI	.818	$\geq .900$
RMSEA	.097	$\leq .080$

表 11 本調査における心理的ウェルビーイング尺度の確認的因子分析の結果

因子	項目	因子負荷量	α 係数	AVE	CR
人格的成長			.899	.863	.989
	これからも、私はいろいろな面で成長し続けたいと思う	.818			
	新しいことに挑戦して、新たな自分を発見するのは楽しい	.868			
	私には、もう新しい経験や知識は必要ないと思う	.645			
	これ以上、自分自身を高めることはできないと思う	.623			
	自分らしさや個性を伸ばすために、新たなことに挑戦することは重要だと思う	.776			
	私は、新しい経験を積み重ねるのが、楽しみである	.807			
	私の能力は、もう限界だと思う	.569			
	私の人生は、学んだり、変化したり、成長したりする連続した過程である	.634			
人生における目的			.903	.830	.988
	私は現在、目的なしにさまよっているような気がする	.782			
	私の人生にはほとんど目的がなく、進むべき道を見いだせない	.840			
	本当に自分のやりたいことが何なのか、見出せない	.822			
	自分がどんな人生を送りたいのか、はっきりしている	.638			
	私はいつも生きる目標を持ち続けている	.611			
	私は、自分が生きていることの意味を見出せない	.765			
	私の人生は退屈で、興味がわからない	.820			
	私は、自分の将来に夢を持っている	.516			
自律性			.807	.900	.972
	私は何かを決めるとき、世間からどうみられているかとても気になる	.519			
	重要なことを決めるとき、他の人の判断に頼る	.608			
	自分の生き方を考えるとき、人の意見に左右されやすい	.907			
	自分の考え方は、そのときの状況や他の人の意見によって、左右されがちである	.835			
積極的な他者関係			.788	.866	.974
	私は、あたたかく信頼できる友人関係を築いている	.616			
	他者との親密な関係を維持するのは、面倒くさいことだと思う	.517			
	私はこれまでに、あまり信頼できる人間関係を築いてこなかった	.586			
	私は他者といると、愛情や親密さを感じる	.738			
	私は他者に強く共感できる	.629			
	自分の時間を他者と共有するのはうれしいことだと思う	.659			

表 12 本調査における心理的ウェルビーイング尺度の因子間相関

因子	1	2	3	4
1 人格的成長	1.000			
2 人生における目的	.581	1.000		
3 自律性	.306	.387	1.000	
4 積極的な他者関係	.483	.560	.229	1.000

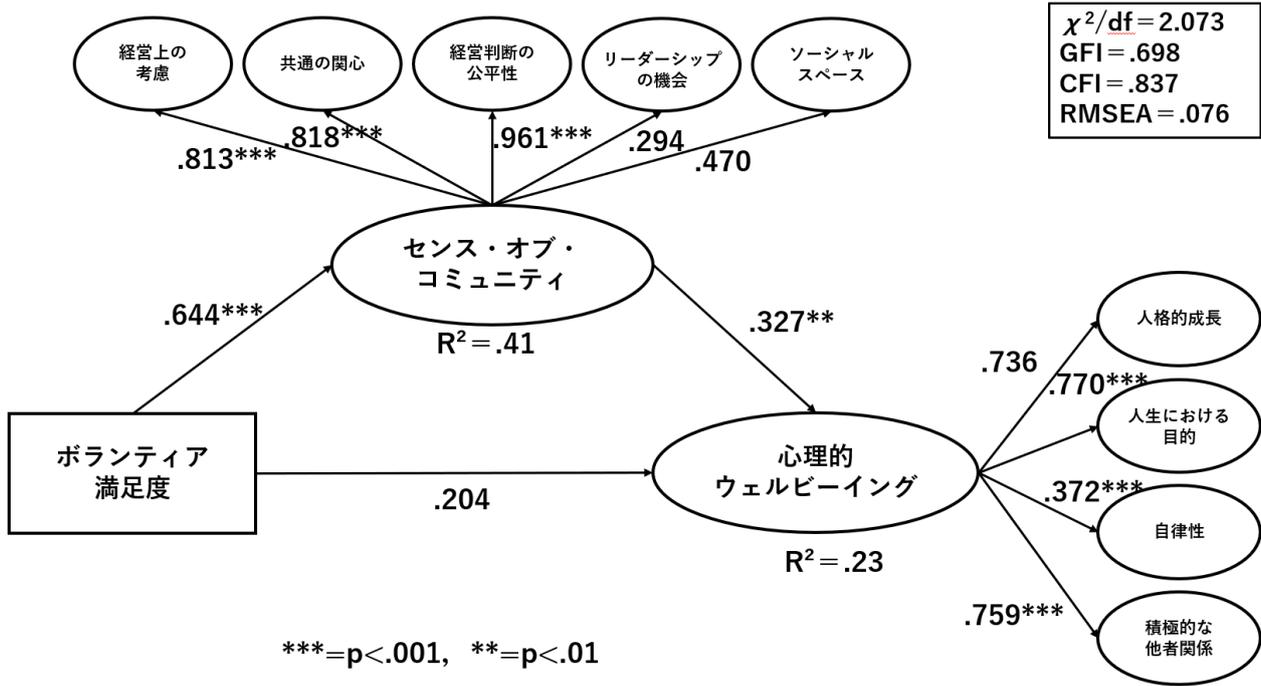


図 2 仮説モデルの検証結果

表 13 本調査における SOC 尺度因子得点の平均の比較（性別）

因子	男性	女性	無回答	F値	有意確率
経営上の考慮	3.85	3.83	3.00	0.42	n.s.
共通の関心	3.42	3.39	2.33	0.76	n.s.
経営判断の公平性	3.44	3.55	2.67	0.72	n.s.
リーダーシップの機会	2.76	2.73	2.33	0.14	n.s.
ソーシャルスペース	2.56	2.71	2.00	0.74	n.s.

***=p<.001, **=p<.01, *=p<.05, n.s.=有意差なし

表 14 本調査における心理的ウェルビーイング尺度因子得点の平均の比較（性別）

因子	男性	女性	無回答	F値	有意確率
人格的成長	4.17	4.14	4.25	0.07	n.s.
人生における目的	3.92	3.86	3.63	0.18	n.s.
自律性	3.52	3.37	3.50	1.45	n.s.
積極的な他者関係	3.45	3.55	3.00	0.89	n.s.

***= $p<.001$, **= $p<.01$, *= $p<.05$, n.s.=有意差なし

表 15 本調査における SOC 尺度因子得点の平均の比較（年齢別）

因子	20代以下	30代	40代	50代	60代	70代以上	F値	有意確率
経営上の考慮	3.44	3.69	3.99	3.92	3.79	3.83	0.89	n.s.
共通の関心	2.69	3.15	3.50	3.44	3.47	3.55	2.66	*
経営判断の公平性	3.11	3.31	3.53	3.66	3.50	3.44	0.96	n.s.
リーダーシップの機会	2.47	2.82	2.63	2.76	2.80	2.83	0.59	n.s.
ソーシャルスペース	2.44	2.87	2.76	2.75	2.53	2.51	0.67	n.s.

***=p<.001, **=p<.01, *=p<.05, n.s.=有意差なし

表 16 本調査における心理的ウェルビーイング尺度因子得点の平均の比較（年齢別）

因子	20代以下	30代	40代	50代	60代	70代以上	F値	有意確率
人格的成長	4.03	4.01	4.19	4.35	4.00	4.13	1.501	n.s.
人生における目的	3.60	3.69	3.80	3.81	4.01	4.16	1.934	n.s.
自律性	3.32	3.37	3.24	3.45	3.41	3.76	2.952	*
積極的な他者関係	3.58	3.55	3.45	3.43	3.55	3.59	0.387	n.s.

***= $p<.001$, **= $p<.01$, *= $p<.05$, n.s.=有意差なし

表 17 本調査における SOC 尺度因子得点の平均の比較

(スポーツボランティア活動経験の有無別)

因子	経験あり	経験なし	F値	有意確率
経営上の考慮	3.83	3.84	0.01	n.s.
共通の関心	3.52	3.26	4.48	*
経営判断の公平性	3.52	3.47	0.16	n.s.
リーダーシップの機会	2.88	2.58	6.24	*
ソーシャルスペース	2.77	2.50	3.52	n.s.

***= $p<.001$, **= $p<.01$, *= $p<.05$, n.s.=有意差なし

表 18 本調査における心理的ウェルビーイング尺度因子得点の平均の比較

(スポーツボランティア活動経験の有無別)

因子	経験あり	経験なし	F値	有意確率
人格的成長	4.11	4.19	0.60	n.s.
人生における目的	3.97	3.80	2.36	n.s.
自律性	3.56	3.30	9.32	**
積極的な他者関係	3.54	3.47	0.69	n.s.

***=p<.001, **=p<.01, *=p<.05, n.s.=有意差なし

付録

松本マラソン2022ボランティアの皆様へのアンケート

Q1. 以下の質問について、あてはまるものに○、もしくは回答をご記入ください。

性別； 1. 男性 2. 女性 3. その他 4. 無回答

年齢； () 歳

お住まい； 1. 松本市内 2. 長野県(松本市を除く) 3. 長野県外 () 都道府県

これまでにスポーツボランティアを経験したことはありますか； 1. はい →約 () 回 2. いいえ

【はい】とお答えいただいた方：あなたが行ったことがあるスポーツボランティア活動は何ですか。あてはまるものすべてに○をつけてください；

1. 日常的な活動(審判、指導、運営や世話、施設管理など)
2. 地域のスポーツイベントでの活動(審判など専門的な活動、運営や世話など)
3. 全国・国際的なスポーツイベントでの活動(審判など専門的な活動、運営や世話など)

松本マラソンでのボランティア経験； 今回を含めて () 回目

本日担当した活動場所はどこですか；

1. スタート会場
2. コースサポート
3. エイドステーション・給水所
4. フィニッシュ会場

松本マラソン2022のボランティア活動をどのように知りましたか。あてはまるものすべてに○をつけてください；

1. 松本市のHPをみて
2. 松本マラソン2022のHPをみて
3. 松本マラソン2022の公式SNSをみて
4. 松本市の広報誌をみて
5. 家族や友人などに誘われて
6. その他 ()

Q2. 松本マラソン2022でボランティアとして活動し、以下のものはどの程度あてはまりますか。

あてはまる番号に○をつけてください。

全くあてはまらない

非常にあてはまる

松本マラソン2022のボランティア活動には満足している・・・・・・・・・・ 1-----2-----3-----4-----5

次回大会(2023大会)にもボランティアとして参加したい・・・・・・・・・・ 1-----2-----3-----4-----5

Q3. あなたは松本マラソン2022にボランティアとして参加し、以下のものはどの程度あてはまりますか。

それぞれの項目について、あてはまる番号に○をつけてください。

(ここでいうリーダー、スタッフは、ボランティアを除く松本マラソン実行委員会などのスタッフを指します)

全くあてはまらない

非常にあてはまる

松本マラソンのリーダーたちは、ボランティアを大切に思っている・・・・・・・・ 1-----2-----3-----4-----5

松本マラソンのリーダーたちは、ボランティアをサポートしてくれる・・・・・・・・ 1-----2-----3-----4-----5

松本マラソンのリーダーと気さくに話ができる・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1-----2-----3-----4-----5

松本マラソンの他のボランティアと価値観が似ている・・・・・・・・・・・・・・・・ 1-----2-----3-----4-----5

松本マラソンのボランティアに参加すると、自分の居場所があるように感じる・・・ 1-----2-----3-----4-----5

ボランティアに参加することで、同じ思いをもった仲間を得ることができる・・・ 1-----2-----3-----4-----5

松本マラソンで働くスタッフは、みんなのためになる様に決定をしてくれる・・・ 1-----2-----3-----4-----5

松本マラソンで働くスタッフは、公正な判断をしている・・・・・・・・・・・・・・・・ 1-----2-----3-----4-----5

松本マラソンで働くスタッフは、決断を下す際にみんなの希望を考慮している・・・ 1-----2-----3-----4-----5

松本マラソンの運営について、私は影響力を持っている・・・・・・・・・・ 1-----2-----3-----4-----5

何か問題が発生した場合には、その解決に協力することができる・・・・・・・・ 1-----2-----3-----4-----5

松本マラソンで行われることについては意見を言うことがある・・・・・・・・ 1-----2-----3-----4-----5

松本マラソンに行くとボランティア同士が交流できる場がある・・・・・・・・ 1-----2-----3-----4-----5

松本マラソンに行くと他のボランティアと交流できる場があることを認識している・・・ 1-----2-----3-----4-----5

松本マラソンは私が他のボランティアと交流する場を作っている・・・・・・・・ 1-----2-----3-----4-----5

Q4. 現在のあなた自身についてお聞きします。

以下のそれぞれの項目について、あなたのお考えに近い番号に○をつけてください。

	全くあてはまらない	非常にあてはまる
これからも、私はいろいろな面で成長し続けたいと思う	1-----2-----3-----4-----5	
新しいことに挑戦して、新たな自分を発見するのは楽しい	1-----2-----3-----4-----5	
私には、もう新しい経験や知識は必要ないと思う	1-----2-----3-----4-----5	
これ以上、自分自身を高めることはできないと思う	1-----2-----3-----4-----5	
自分らしさや個性を伸ばすために、新たなことに挑戦することは重要だと思う	1-----2-----3-----4-----5	
私は、新しい経験を積み重ねるのが、楽しみである	1-----2-----3-----4-----5	
私の能力は、もう限界だと思う	1-----2-----3-----4-----5	
私の人生は、学んだり、変化したり、成長したりする連続した過程である	1-----2-----3-----4-----5	
私は現在、目的なしにさまよっているような気がする	1-----2-----3-----4-----5	
私の人生にはほとんど目的がなく、進むべき道を見いだせない	1-----2-----3-----4-----5	
本当に自分のやりたいことが何なのか、見出せない	1-----2-----3-----4-----5	
自分がどんな人生を送りたいのか、はっきりしている	1-----2-----3-----4-----5	
私はいつも生きる目標を持ち続けている	1-----2-----3-----4-----5	
私は、自分が生きていることの意味を見出せない	1-----2-----3-----4-----5	
私の人生は退屈で、興味がわからない	1-----2-----3-----4-----5	
私は、自分の将来に夢を持っている	1-----2-----3-----4-----5	
私は何かを決めるとき、世間からどうみられているかとても気になる	1-----2-----3-----4-----5	
重要なことを決めるとき、他の人の判断に頼る	1-----2-----3-----4-----5	
自分の生き方を考えるとき、人の意見に左右されやすい	1-----2-----3-----4-----5	
自分の考え方は、そのときの状況や他の人の意見によって、左右されがちである	1-----2-----3-----4-----5	
何かを判断するとき、社会的な評価よりも自分の価値観を優先する	1-----2-----3-----4-----5	
私は、自分の行動は自分で決める	1-----2-----3-----4-----5	
自分の行動を決定するとき、社会的に認められるかどうかをまず考える	1-----2-----3-----4-----5	
習慣にとらわれず、自分自身の考えに基づいて行動している	1-----2-----3-----4-----5	
私は、あたたかく信頼できる友人関係を築いている	1-----2-----3-----4-----5	
他者との親密な関係を維持するのは、面倒くさいことだと思う	1-----2-----3-----4-----5	
私はこれまでに、あまり信頼できる人間関係を築いてこなかった	1-----2-----3-----4-----5	
私は他者といると、愛情や親密さを感じる	1-----2-----3-----4-----5	
私は他者に強く共感できる	1-----2-----3-----4-----5	
自分の時間を他者と共有するのはうれしいことだと思う	1-----2-----3-----4-----5	

Q5. 松本マラソン2022に関するご意見・ご要望等、自由にお書きください。

ご協力いただき、ありがとうございました。

